

## 卒業論文の要旨

論文題目	戦争詩の意義についての一考察 ―ウンガレッティと田中克己を例に
氏名	丸山 葵
メジャー	哲学
<p>世界情勢が不安定な現代において、既に歴史となった戦争体験を学ぶことがその問題を紐解く出発点となろう。卒業論文「戦争詩の意義についての一考察―ウンガレッティと田中克己を例に」では、過去の戦争を見つめ、その中に生きた個人の単位の視点を重要視したいという考えからテーマを決定した。ここではイタリアと日本、第一次世界大戦と太平洋戦争という条件の違いをふまえつつ、G.ウンガレッティと田中克己二人の詩人の作品から戦争詩の意義やあり方を考察した。第一章と第二章では各詩人の来歴や歴史的背景に触れつつ戦争期の作品から何篇かを取り上げ、彼らの詩についての姿勢を検証した。エジプトのアレクサンドリアに生まれたウンガレッティは、イタリアに渡り第一次世界大戦に兵士として従軍する。彼の第一詩集『よろこび』には前線で創作された多くの詩が収録されており、彼は戦地という極限状態の中にあつて自己を問う内省的な詩を創作している。他方、東洋学者でもあつた田中克己は報道員として南方で従軍するが、『南の星』ではそうした立場が反映された報道詩また調査研究としての側面が顕著であり、真珠湾攻撃を題材とした「ハワイ爆撃行」(『神軍』)にもそうした彼の特徴を見出すことができる。第三章ではそれらの比較と、戦争詩の意義についての考察を行った。「戦争に関わる詩」は一括して「戦争詩」として扱われる傾向にある。しかし詩人として、そして兵士として戦争期を過ごしたウンガレッティと田中の両人が、過酷な状況下でどのような言葉で作品を遺したか、彼らの詩への姿勢が浮き出る中でどのように戦争を、当時の情勢の一風景を描写したかによって、各人の個人としての側面を中心に扱うことで、今回の論文の主題でもある戦争詩の意義を考察した。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>本卒業論文は、「戦争詩」というテーマに即して、第一次世界大戦におけるイタリアのG.ウンガレッティおよび第二次世界大戦における日本の田中克己の詩を取り上げ、各々の作者の詩作の特質と戦争に直面した人間の創作活動としての「詩」について分析、考察を行った作品である。それぞれの詩人の来歴と時代背景を検証し、「戦争」時の文学作品に対する通説や既成概念から脱却した「戦争詩」の実相を見極め、戦争という状況下における詩とその創作の意義について自らの「戦争詩」観を構築・表明している。真摯な検証と考察、自らの戦争詩観における意欲的な研究とその姿勢に基づき、丸山葵さんの卒業論文「戦争詩の意義についての一考察―ウンガレッティと田中克己を例に」を優秀卒業論文として推薦する。</p>	